

イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授
小田島 恒志

(第16回)

テラストハウス

始めてイギリスに行ったときに覚えた言葉に「セミ・デタッチト・ハウス (semi-detached house)」がある。いわゆる一戸建て (detached house) に対して、建物の真ん中から二軒に分かれている、と言うより、二軒が隣り合わせにくっ付いている造りなので、強いて訳すなら「二戸建て」とでも言おうか。これが通りの両側にずらりと並んでいるのが典型的なイギリス中流住宅街の街並みである。さらに住宅密集地になると、二軒ずつではなく、何軒もくっ付いた一通りの角から角まで通りの長さ分だけくっ付いた一文字通り「軒並み」が見られるが、これをテラストハウス (terraced house) と言う。もともとは、産業革命以後、労働者が大勢集まってきた炭鉱町や大工場の周辺などに作られたが、今では至る所で見られる住宅スタイルで、労働者の集合住宅どころか、セレブの住む「高級テラストハウス」まである。昔はこれが「長屋」と訳されることもあったが、労働者用の手狭なものであっても日本式に考えれば2~3階建てで3LDKぐらいはあるので、決して窮屈なわけではない。とは言え、数年前、サッカー選手デイヴィッド・ベッカムの「生家」のテラストハウスが売りに出されて1億円ほどで買い手がついた時、日本のメディアが「ベッカムの生家のテラス付き邸宅」と訳していたのには失笑した。テラストハウスの中でも特に小さめの典

型的労働者階級の住居だったのだ。

セミ・デタッチト・ハウスもテラストハウスも、通りの側から (つまり正面から) 見ると外観はそれぞれだが、建物の裏側はどちらも庭があり、隣家の庭と接している。庭の奥 (建物から遠い端) は一本先の通りに連なる家々の裏側の庭と接することになる。もちろん、塀などで隔てられているが、生垣程度の低い境目のこともあり、裏同士では結構丸見えである。通りから見える所に洗濯物を干すことを条例で禁じるほどプライバシーを重んじ、他の欧米諸国の人々に比べると決して友好的とは言えない英国人の、この裏側の開放感は意外である。

高度経済成長時代に、労働者の住宅確保が困難になり、さらなる狭小地に大勢住まわせる狙いで、この庭部分のないテラストハウス、すなわち、裏側の家と庭で接するのではなく、壁一枚で背中合わせになっている「バック・トゥ・バック (back-to-back)」と呼ばれる住宅が大量に建設された。風通しが悪く、あまりにも劣悪な住居環境ということで、その後、悉く取り壊されていったが、バーミンガムの一角に「負の遺産」として一部保存されている。訪ねてみると、なるほど、確かに狭い。けど、日本の我が家よりは十分広く思えたのがちょっと悲しい。